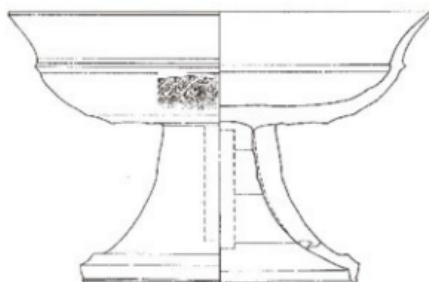


時津町埋蔵文化財調査報告書第2集

前島古墳群 II

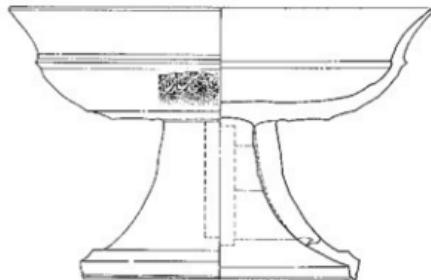


1994

長崎県時津町教育委員会

時津町埋蔵文化財調査報告書第2集

前島古墳群 II



1994

長崎県時津町教育委員会

発刊にあたって

前島古墳群は、平成2年9月に続いて第2回目の発掘調査であります。この古墳群は全部で6基が確認されており、今回はこのうちの5号墳・6号墳・7号墳・8号墳の4基が集中している地点の発掘調査を行いました。県文化課のご指導によれば、弥生時代のものと推定される箱式石棺3基が今回新たに発見され、その昔集団墓地として利用され、また調査した古墳のうち2基については、出土遺物から5世紀中頃のものということで、県内の古墳のなかでも古い方に属するとのことです。

このたびの発掘調査の多大な成果は、古代人の生活文化を知るうえに貴重な文化遺産であり、このような文化財が町内にあるということは、我々町民の誇りであります。この貴重な文化財については、今後整備保存し、生きた教材として残したいと考えております。

調査にあたって、大変多忙ななか、県文化課には多大なご指導とご協力をいただきました。また地元関係者のご協力に深く感謝申しあげ発刊のご挨拶といたします。

平成6年3月

時津町教育委員会

教育長　満　見　幸　男

例　　言

1. 本書は平成5年度に実施した、西彼杵郡時津町所在の前島古墳群の調査報告書である。

2. 調査は時津町教育委員会が主体となり、依頼により長崎県教育庁文化課が調査を担当した。

時津町教育委員会　教育長　満見幸男

教育次長　中村勉

社会教育課長　坂本敏弘

社会教育係長　桑原智信

事務吏員　浜崎憲睦

〃　松園喜秀

〃　出岐貴弘

長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　福田一志

文化財調査員　松尾昭子

3. 本書の執筆は福田が行った。

4. 本書に関する写真は、福田の撮影による。

5. 本調査に関しての実測図・写真・遺物等については文化課で保管しているが、報告書刊行後は町に返還の予定である。

6. 本書の編集は福田による。

本文目次

I 調査に至る経緯.....	1
II 遺跡周辺の地理的・歴史的環境.....	1
III 調査.....	4
(1) 調査の概要.....	4
(2) 2号石棺.....	5
(3) 3号石棺.....	7
(4) 4号石棺.....	7
(5) 5号石棺.....	8
(6) 第6号墳.....	10
(7) 第7号墳.....	13
(8) 出土遺物.....	15
IV まとめ.....	15

挿 図 目 次

Fig. 1	周辺の地形と遺跡地図（1／25,000）	2
Fig. 2	前島の地形と遺跡の分布	3
Fig. 3	調査区域周辺地形図	4
Fig. 4	2号石棺実測図（1／30）	5
Fig. 5	3号石棺実測図（1／30）	6
Fig. 6	3号石棺内出土土器（1／3）	7
Fig. 7	4号石棺実測図（1／30）	8
Fig. 8	5号石棺内出土土器（1／3）	9
Fig. 9	5号石棺実測図（1／30）	9
Fig. 10	6号墳周辺出土須恵器（1／3）	10
Fig. 11	6号墳実測図（1／40）	11
Fig. 12	7号墳出土鍔・鋤先状鉄製品（1／3）	13
Fig. 13	7号墳実測図（1／40）	14
Fig. 14	出土遺物実測図（1／3）	16
Fig. 15	出土遺物実測図（1／3）	17
Fig. 16	出土遺物実測図（1／3）	18
Fig. 17	3号・5号石棺模式図	19
Fig. 18	大村湾岸の5世紀代の古墳	20

図 版 目 次

P L 1	遺跡遠景・近景	23
P L 2	1号・2号石棺検出状況	24
P L 3	3号石棺の状況	25
P L 4	3号石棺遺物出土状況・4号石棺の状況	26
P L 5	5号石棺の状況	27
P L 6	6号墳の状況	28
P L 7	6号墳の状況	29
P L 8	7号墳の状況	30
P L 9	出土遺物	31
P L 10	出土遺物	32
P L 11	出土遺物	33
P L 12	出土遺物	34

I 調査に至る経緯

昭和56年の県文化課による時津町内の遺跡周知事業で、前島の古墳群についてもその現状が確認された。その現況から保護策をという声も始め、平成元年に県文化課と町教育委員会により、古墳の整備活用のための調査についての協議がなされた。この協議により、調査は平成2年度中に実施することになった。平成2年の調査では、主にタケク島の2基の古墳が調査対象となり、実測調査が行われた。前島については、5～8号墳のうち、7号墳に試掘場が入れられ、内部主体が箱式石棺であることが確認されて埋め戻されている。又、弥生時代の箱式石棺1基も新たに確認され、前島の古墳群が単に古墳時代のみではなく、弥生時代から墳墓として利用されていたことが明らかとなった。この調査をふまえ、時津町で調査や整備の基本方針を計画し、全体的な計画をたてて今後の調査を実施することが急務であるとの結論に達した。又その具体的な方針として7項目を掲げ、それらについて今後検討されねばならないとして、平成2年の調査結果報告としている。今回の調査は前回の計画方針をうけ、前島の5～8号墳の調査を主体とし、前島の古墳群の性格を明らかにし、整備のための基礎資料を得ることを目的とするものである。

II 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

前島古墳群は西彼杵郡時津町子々川郷前島にある。時津町は大村湾の最奥部、西彼杵半島の付け根に位置し、南は長崎市、北は国道206号線により佐世保市へと繋がる。近年は長崎市のベッドタウンとして人口も急速に増加し、平成4年の調査時には25,906人が数えられている。

町全体は東西約7km、南北約9km、面積21km²と狭小であり、西部から南部にかけては、標高200m～300mの連峰が並び、そのまま海岸線へと続く急峻な地形をなしている。このため交通の要衝の地でありながら平地が少ないため、江戸時代より埋め立て工事が行なわれ、現在も工業用地、宅地確保のため大村湾岸の埋め立てが進行中であり、町の面積は年々拡張されている。

地質的には、西彼杵変成岩類と長崎市全域をおおう安山岩、玄武岩を主とする火山岩類などいろいろな岩石が複雑に分布している。遺跡がある前島は、島全体が結晶片岩で覆われ、ところどころに石英脈も発達している。古墳の石棺や弥生の箱式石棺の原材料、古墳の棺床の敷石である石英など、現地で材料を入手できる環境であったことも、前島に墓地群を形成する大きな要因となったであろう。

時津町を歴史的に見れば、古くは縄文時代～古墳時代の遺跡が狭小な平地に点々と営まれていることが理解でき、大規模な遺跡が発達する環境でなかったことが窺える。縄文時代の遺跡としては、地図中21の時津北小学校遺跡から曾畠式土器が発見されているほかは、断片的な資料しか発見されていない。弥生時代も同じく時津北小学校遺跡から、磨製片刃石斧・壺・須玖

式土器等の遺物が発見されており、前島においても弥生中期～後期までの遺物が出土している。古墳時代の遺跡については、前島の古墳群以外では9の登呂福遺跡で須恵器片が見つかっているほかは遺跡は見当らない。奈良～平安時代の遺跡の発見はなく、中世に入り肥前の国彼杵荘御家人として時津四郎の名がある。室町期には彼杵一揆の連判状に時津六郎の名が見え、在地豪族として時津氏が勢力を有していたことは間違いないようである。15世紀後半には深堀氏12代澄時によって時津氏が滅ぼされたとあり、以後時津は大村領となる。江戸時代には時津は長崎街道の裏街道にあたる時津街道により、江戸、上方商人の往来が栄んで、港町・商人の町として栄えたとある。時津街道は、長崎西坂から時津港に至る道程を言い、かの26聖人が彼杵から小舟に乗り上陸したのが時津であり、ここより西坂の刑場まで歩いたとされる。また、ドイツ人の博物学者で医者でもあるケンベルも5時間をかけ、時津港から彼杵へと渡っている。このようにかつては大村湾各地への往来のため時津港は栄えたが、現在は大村空港へ高速艇が就航するのみである。

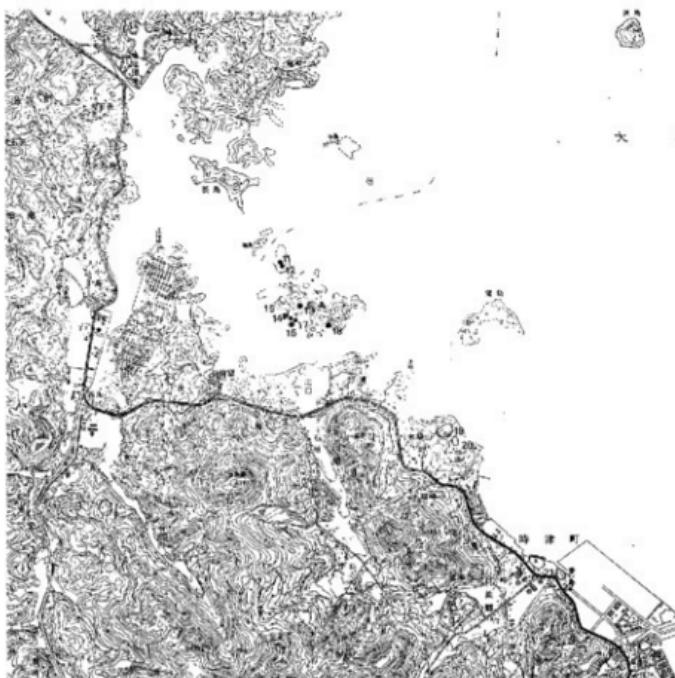


Fig. 1 周辺の地形と遺跡地図

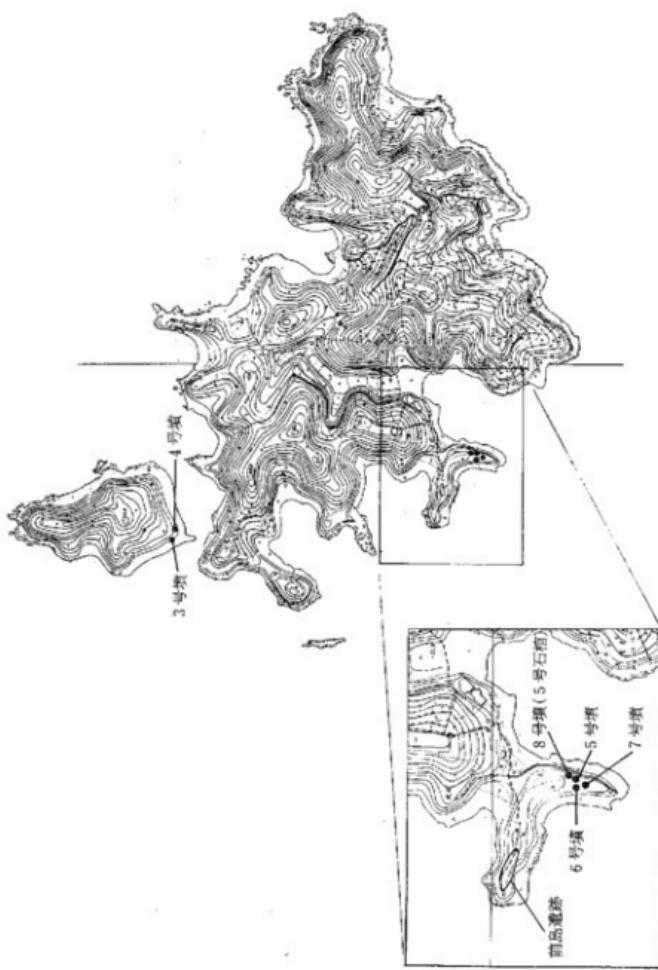


Fig. 2 前島の地形と遺跡分布図

III 調 査

(1) 調査の概要

1次調査ではタケク島の古墳の調査に主眼がおかれた。そのため前島での1次調査は、7号墳に試掘 sondageを入れ、内部主体の確認と、新たに箱式石棺一基を確認して終了している。2次調査では、1次調査で確認された遺構以外の基數を調査するために、1号石棺の北側を掘り下げることから作業を始めた。その結果表土直下から弥生式土器片が多量に出土し、2号石棺が確認された。さらに北側を調査したが他に遺構はなかったため、前回調査した7号墳の石棺を掘り上げ、実測を行なった。7号墳の実測終了後、6号墳の調査を行なった。6号墳の調査が進むにつれて、蓋石等が完全な形で残り、盗掘をうけていない古墳であることが判明したが、内部には遺物の副葬品はなかった。6号墳の調査中に7号墳等の棺材と思われていた板石が、箱式石棺の蓋石であることがわかり、他にも同様な棺材が北側にもあったため、これらに3号・4号石棺の名称を与え調査した。3号・4号は調査前から蓋石が露出した状態であったにもかかわらず、下部構造は保存状態良好であった。ただし、蓋石が容易に動かせる状況であったことと、4号石棺の蓋石は既に割れた状況であったため実測を行うこととした。これらの実測とあわせて、8号墳とされていた古墳の調査を併行しておこなった。その結果8号墳とされていたものは、内部の副葬品から、弥生時代中期の箱式石棺であることが判明した。これにより当遺跡に現存する遺構は、弥生時代の箱式石棺5基と古墳3基（1基は現状保存）であることが確認された。

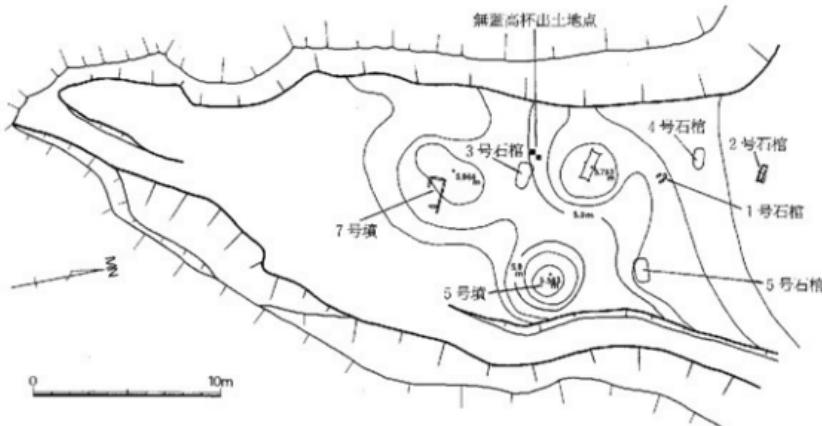


Fig. 3 調査区域周辺地形図

(2) 2号石棺

2号石棺は遺跡の一番北側に位置している。棺の方向はほぼ東一西をとり、小口の広い方が東側を向いている。蓋石は本来一枚石を使用していたものと考えられるが、数枚に割れて側石

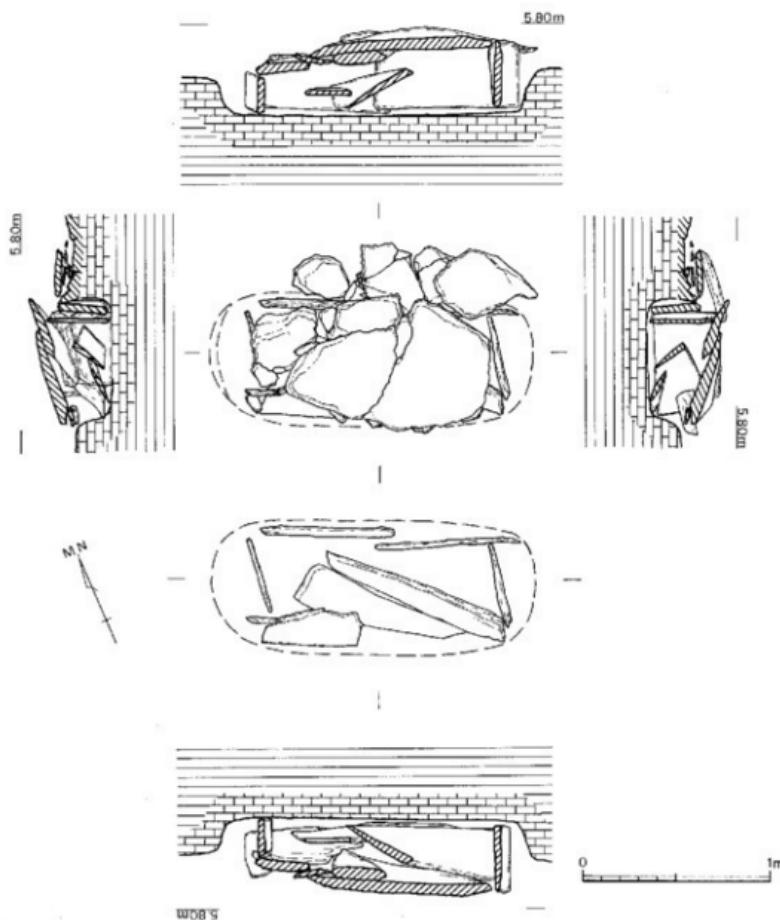


Fig. 4 2号石棺実測図

が見える状態であった。棺身は内法1m20cm、小口が約40cm、深さ30cmを測る。側石の厚さは5cmほどで、3～5号石棺に比べ薄いものを使用している。南側の側石は北側に倒れ込み、3枚に割れている。南側の側石が1枚石を使用するのに対し、北側は2枚の板石を使用している。棺内から副葬品の出土はなかったが、周辺からは多量の中後期後葉～後期後葉までの土器が出土

5.30m

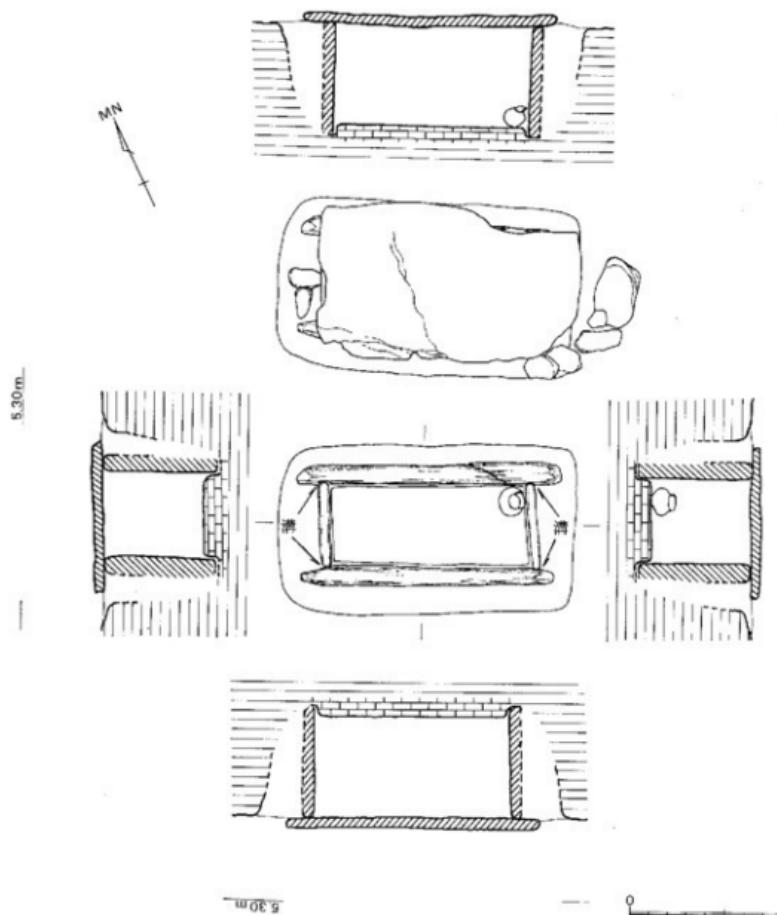


Fig. 5 3号石棺実測図

していることや、3号、5号石棺がその副葬品から中期初頭に比定でき、これらと2号石棺の形態が相異することなどからも、後葉以後の時期に築造されたものと考えられる。

(3) 3号石棺

6号墳と7号墳の間、やや6号墳よりに位置し、蓋石の長軸をほぼ東一西にとる。蓋の長軸は1m30cmを測り、短軸は約80cmの長方形を呈し、厚さ8cmの結晶片岩を使用している。縁辺が欠けて本来の形をいくらか失っているが、復元するときれいな長方形に整形されていたことがわかる。土壙プランは岩盤である結晶片岩を掘り抜いて、隅丸方形状に掘られている。下部においては地山である床面を水平に保ち、側石をはめ込むための凹部を作り出している。棺身は内法で104cm、小口が40cm、深さが床面から52cmを測り、すべて結晶片岩の1枚石で側石の長さが140cm、高さ59cm、厚さ10cm、小口石が長さ45cm、高さ56cm、厚さ6cmである。北側側石の東側に亀裂を生じているが、棺身の形状はほぼ原形を保っているものと思われ、側石・小口石もほぼ垂直に立っていた。棺内は両小口側で20cm、中央部に10cm程度のきめ細かな土がU字状に堆積しており、土を除去すると北東隅に口縁部を半分欠くだけのほぼ完全な姿の壺が出土した。

この石棺で特筆すべきことは、側石に小口石を入れ込むための溝が加工されていることである。小口石の両端がこの溝にくい込んでおり、土圧による棺の歪みを防いでいるものと考えられる。

(4) 4号石棺

2号石棺の南側にあり、遺跡全体では北側に位置する。3号石棺の蓋石が最初古墳等の棺材が抜きとられたものが放置された状態とされていたのと同様に、4号石棺の蓋石も露出した状態であった。3号石棺に比べ蓋石は小さく、長軸が1m10cm、短軸が約60cm、厚さが2.5cm~4cmを測る。蓋石の厚みは薄く、損傷が著しいが他の石棺と同様に長方形に加工していたものと

考えられる。土壙プランは棺身に対して大きく、長軸1m20cm、短軸約75cmを測る。結晶片岩の岩盤を削って墳壙としており、棺身との間の充填土は結晶片岩の風化土である粗い砂と、明褐色の粘土塊がみられた。粘土塊については棺の密閉のためのものかと考えられるが、小口付近では特に見られず、粘土も丸い塊で出土するなど状況的には充填土として投げ込まれたような状態であった。棺身はす

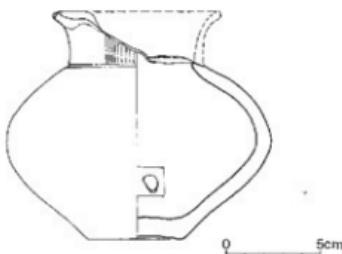


Fig. 6 3号石棺出土土器

べて結晶片岩の一枚岩で構成され、内法で60cm、西側小口が20cm、深さ36cmを測る。南側の側石が最大厚6cmの板石を使用しているのに対し、北側は2～3cmの薄い石を使用し、土庄のため中央部より折損している。4枚の側石、小口石ともほぼ垂直に立っており、棺身長に対し深さが深いことが大きな特徴である。又、規模的には2～5号石棺の中で最も小さいもので小児用かと考えられる。

(5) 5号石棺

5号石棺について
は、1次調査において
て「古墳としておく
必要を感じたもの」
として8号墳という
名称を与えていたが、
今回の調査により見
事な結晶片岩の切石
を使用した、弥生時
代の箱式石棺である
ことが判った。この
ため8号墳を5号石
棺と名称を改めること
とする。5号石棺は、6号墳と同じコ
ンタ上に乗り、わず
かな高まりを呈して
いたが、この部分は
北側からの傾斜が幾
分強く、5、7号墳
の平坦な場に接する
地点であるためマウ
ンド状になっていた
と考えられる。調査
の結果、封土を2
～3cmほど除去した

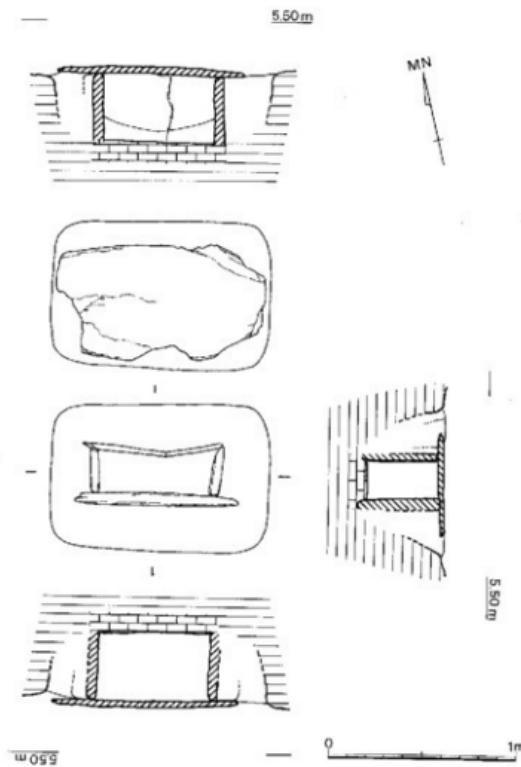


Fig. 7 4号石棺実測図

ところで長軸をほぼ東一西にとる蓋石が表われた。蓋石の長軸は1m40cmを測り、短軸は約69cmの長方形を呈し、厚さ11cmの結晶片岩を使用している。丁寧な仕上げがなされており、完全な長方形に整形され、3号石棺よりも重厚な作りとなっている。棺身は内法で1m07cm、小口が35cm、深さが床面から50cmを測る大形のものである。すべて結晶片岩の1枚石で側石の長さ1m30cm、高さ56cm、厚さ10cm、小口石が長さ43cm、高さ56cm、厚さ7cmを測る。

この石棺も3号石棺と同様に側石の間に小口石を挟みこむための溝が作られている。

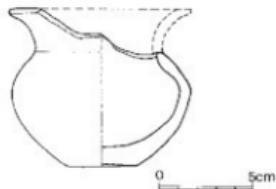


Fig. 8 5号石棺出土土器

5.30m.

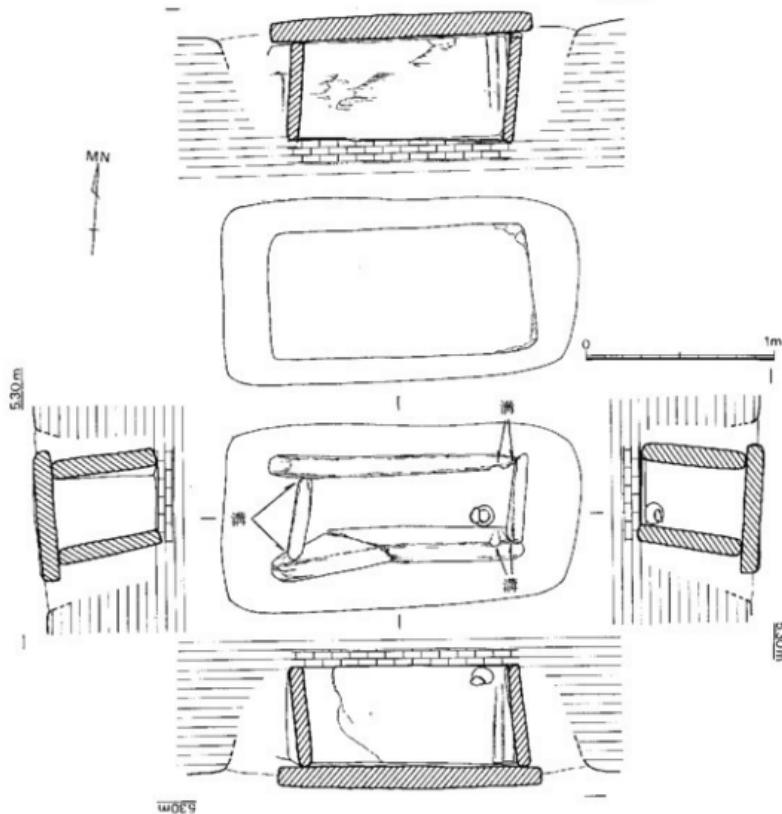


Fig. 9 5号石棺実測図

(6) 6号墳

6号墳は7号墳の北側、5号墳の西に位置し西側は3m程で切り立った崖に迫る。5、7号墳より一段高い所にあり、墳丘の高さは約70cm、東側が若干削られ葺石の一部が露出した状態であった。封土の土砂はかなり流出していると考えられるが、墳丘径は、約5mで円形をよく保っている。

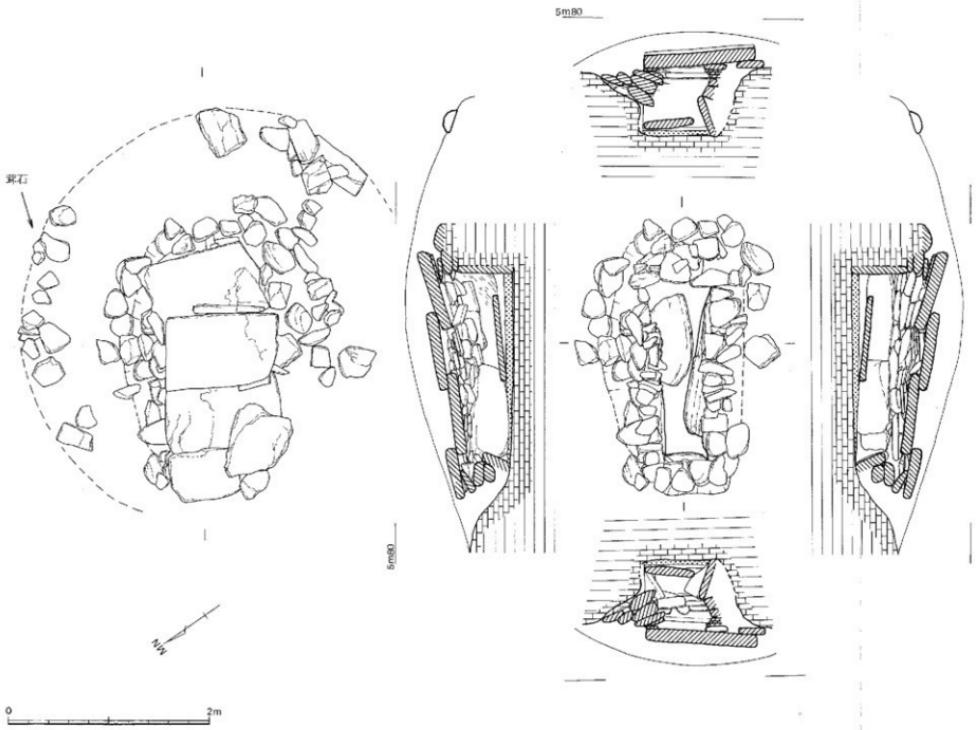
主体部は内法で長軸1m90cmの箱式石棺であった。北側奥の側石が倒壊し、南側の側石も内傾しているものの、その他の部分はほぼ完全な状態であった。地山の結晶片岩を穿った土塙は2.5m×1.7mの長方形のプランを呈するとみられ、深さ60cmを測る。土塙北側は、側石を支えるためのものか段が作られ、側石裏に石を入れ込んでいる。このような状況は7号墳にも見られる。側石は両壁とも2枚の結晶片岩の板石によって構成され、その上に数段の小口積みを行なっている。両側とも土圧により内傾し、小口積みの石も倒れ込んでいるが、上面観はほぼ原形のままと考えられる。棺身は幅が東側で70cm、西側で40cmと開きがあり、東側に頭位を持つと思われる。7号墳と逆向きであることは特筆されるが、地形との関連も考慮する必要があろう。側石上に4～5段扁平な板石を小口積みにしているが、西側では2段位で納め天井石を東から西へ傾斜するように築造されている。したがって小口石は東側が高く、西側が低いものを使用し、天井石は傾斜角約7°を測る。また、天井石は4枚の板石を交互に乗せており、中央の板石の浮いた側石にも凸状に板石を積み込んでいる。棺床には石英の砾が5cm程敷き詰められていた。

遺物

6号墳は盃掘等を受けていないと考えられるが、内部からの副葬品の出土はなかった。ただし、墳丘南側据部から無蓋高杯2点が出土した。墳丘の据部とはいえ6号墳との関連は強いものと考えられる。図左側は、長方形のスカシ窓が四方に入る高杯である。杯部の底部における削りが鋭く水平に整えられ、口縁部は稜を擧に大きく外反する。稜は鋭く、直下に波状文を施す。脚部端部は大きく段を有し内傾する。復元口径17.2cm、杯部高4.6cm、脚部が12.4cmを測る。色調は灰青色を呈し焼成は豊穣で、胎土は精良である。右図の高杯は三角形のスカシ窓を有するもので、脚部端部の納め方、色調、胎土とも先の無蓋高杯と酷似する。



Fig. 10 6号墳周辺出土須恵器 (1/3)



6号坑实测图

(7) 7号墳

5、6号墳の南側に当り、岬の中央部に位置している。5、6号墳が岬の東西に肩を並べるように築造されているのに対し、時津側である岬先端部の中央に築造されていることは、5・6号墳に対してなんらかの有位性があったのであろうか。封土はかなり流失しているが規模的には5・6号墳を上回り、墳丘径は7mはあったと考えられる。又、一次調査により内部主体は石棺であることが知られていた。今回の調査では内部主体の全容を明らかにし、副葬品の確認により、年代を置さえられればとの期待があった。

全容を明らかにした結果、西側に横口を持つ、石棺系の横口式石室であった。蓋石は既に消失しており、南側の側石及びその上の小口積の板石が棺内に倒れ込んでいた。奥壁は内傾しているが、北側の側石は2枚の結晶片岩で構成され、その上に小口積の板石がいくらか残されており、原形をよく保っている。6号墳と同様に側石上に何段かの板石を小口積し、その上から蓋をしていたものであろう。土壇は北側では棺から20~30cmのところでプランが検出されるが、南側では広く掘られ、途中で段を作つて大きな裏込め石により側石を支えるようにしている。棺身の内法は長軸が2m20cm、短軸が90cmで、長幅とも6号墳よりかなり広く作られている。横口部の小口は板石を2枚立て、その間に薄い2枚の板石を入れて蓋とし、さらにその上に閉塞石を立てかけている。横口の部分は40cm程で形式的に備えたと考えられ、造りも貧弱である。西側には岩盤を削つて小口の部分まで傾斜をつけた前頭部と思われる部分も付設している。又棺床には石英の小円礫を5cm程敷き詰めていた。

出土遺物

7号墳の棺内、側石から下に20cm付近で、臘と鉄製品が出土した。臘は口縁部から胸部の肩部が張った付辺で欠損しているが、復原口径10.4cm、胸部の復原最大径が14.8cmになる。扁球状の胸部から頸部が急激に外反し、中程で屈曲し明瞭な稜を残して口縁部へと続く。口唇部も内側に明瞭な稜を有し、内部に緑茶色の自然釉が附着している。頸部に櫛目波状文が、胸部上半に1本の沈線が見られ、その下にも櫛目波状文を施す。孔は胸部のやや上方に穿ち、径は1.4cm程に復原できる。色調は淡灰色をなし焼成は堅致で、胎土は精良である。鉄製品はかなり腐食しているが、中央部が袋状となっているため、動先状鉄製品とした。

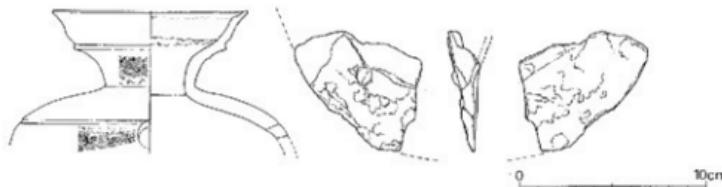
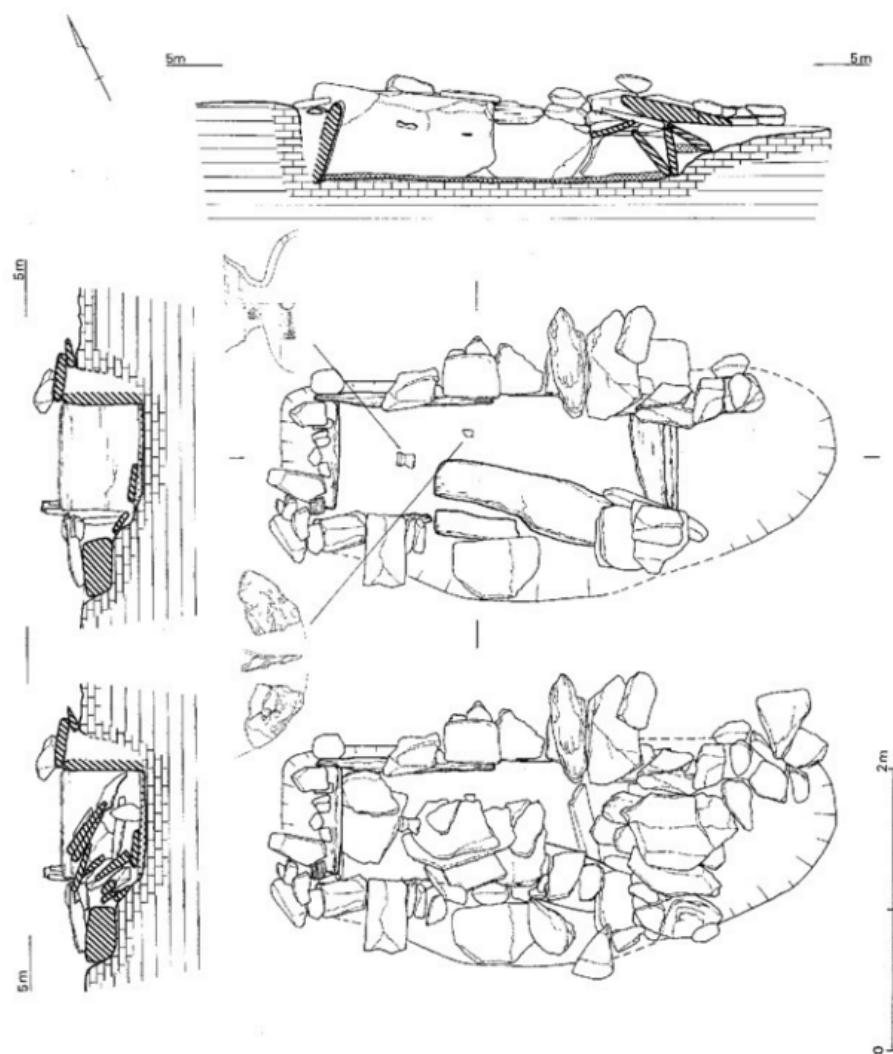


Fig. 12 7号墳出土臘・銚先状鉄製品 (1/3)



7号填穴測図

(8) 出土遺物

遺物は弥生時代中期～後期のものを主体とするが、その多くは古墳の墳丘上からの出土であり、古墳築造時にいかに弥生時代の遺構等が破壊されたかが理解される。また古墳が3基存在するにもかかわらず、須恵器・土師器等の出土が少ないことも一つの特徴である。

Fig. 14は7号墳の調査時に封土内から出土した遺物で、1～5・7～9は弥生式土器、6は土師器と考えられる。すべての出土遺物についていえることであるが、器表がひどく荒れており、いずれも小破片となっている。1は丹塗りの壺の口縁部破片である。T字状を呈し、外側にやや傾く。胎土は荒く、石英粒・角閃石などを混入するものでいわゆる在来系と言われるものである。2・3は鋸先状を呈する壺の口縁部で、7・9やFig. 15の16・17、Fig. 16の19などと対応するものであろう。いずれも在地系と思われる暗赤褐色の丹塗りであるが、19はその胎土や丹の発色の違いなどから北九州からの搬入と考えられる。4・8は、くの字状口縁を呈する壺で外面にハケ目を有する。Fig. 15、12・14は胎土が灰白色を呈する袋状口縁で、石英粒が多量に入る。器種としてはこの他にFig. 16の20・23などの透かし器台などが揚げられる。全体的に見て弥生時代では中期初頭から後期後葉を主体としており、前期の遺物はないようである。又、丹塗り土器が比較的多く出土していることは、この遺跡が祭祀的なことを行なった場であることが、その地理的位置とともに出土した遺構からも予想される。

弥生時代以外にFig. 16、24・27・28の縄文系の遺物も見られる。24は滑石を多量に混入した阿高式土器の口縁部片で、この他胴部片も1点出土している。27・28は蛇紋岩の石斧であるが、かなり風化が激しく白色を呈する。この他に以前から黒曜石片の採集がなされており、特に古墳群の存在する岬より北西に位置する部分は前島遺跡という名称で、縄文時代の遺跡として周知化されていた。今回この前島遺跡についても2×2mの試掘 sondageを入れたが、包含層は存在しなかった。しかしながら少なくとも縄文時代中期に、すでに前島がなんらかの形で利用されていたことは間違いない。

IV ま と め

今回の調査により、前島から南側に延びた狭小な岬に弥生時代の石棺墓5基、古墳3基が確認された。弥生の遺構については古墳築造時にかなり破壊されたと考えられ、古墳についても戦後の開拓以前は島内に30数基あったとされ、現在よりも大規模な墳墓群であったことは間違いない。この墳墓群が何故前島に築造されたかということが最大の課題であるが、まず今回の調査からそれぞれの時代の問題点、新知見等について述べて見たい。

弥生時代については、1次調査時に発見された1号石棺墓を入れ5基が確認されたが、その中で、1・2号石棺と3～5号石棺において構造上の変化が見られることである。3～5号石

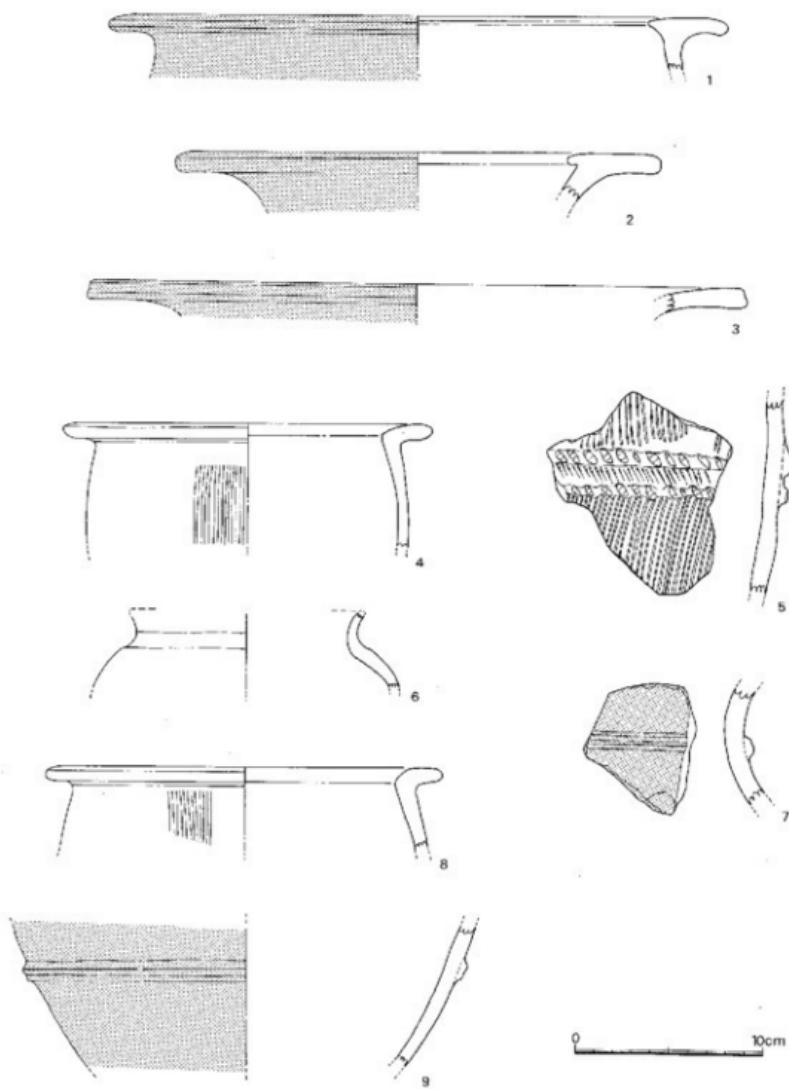


Fig. 14 出土遺物実測図

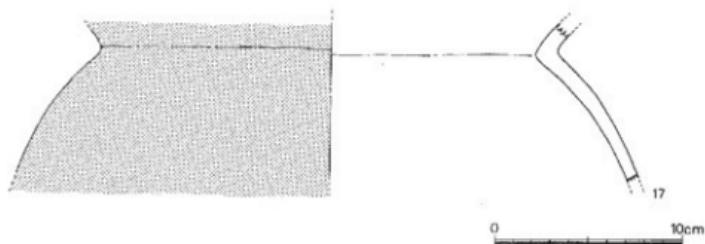
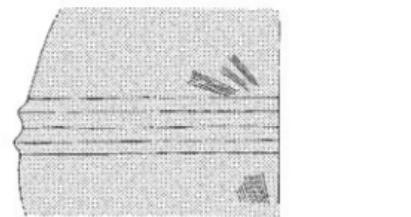
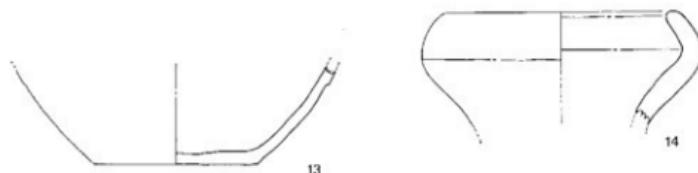
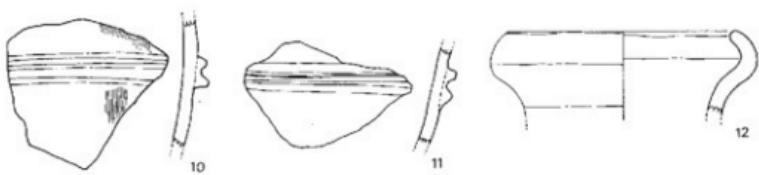


Fig. 15 出土遺物実測図

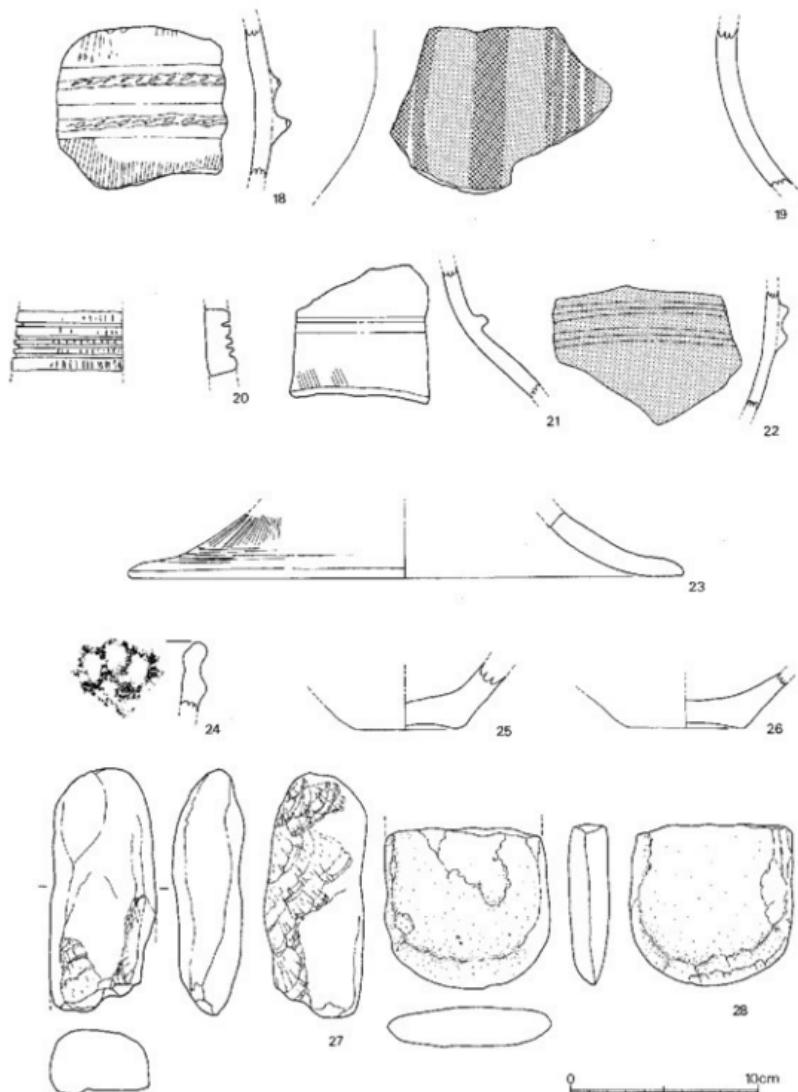


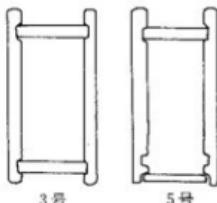
Fig. 16 出土遺物実測図

棺に共通して言えることは、①すべて1枚石を使用している。②蓋石が長方形に加工されている。③小口石の幅に対して深さが深いなどがあげられる。特に3号・5号石棺は側石に小口を入れこむための溝を作り出しており、副葬品として中期初頭の壺を持つなど2つの石棺が、中期初頭の一型式として認定しうるものと考えられる。この3～5号石棺に対し、1・2号石棺は2枚以上の側石で構成され、石も規格性が見られない。又、床面までの深さが浅いなど3～5号石棺に対し構造上相異するものと思われ、そこに

は時間的な差があるものと考えられる。弥生の出土土器の中で、前期に属すると思われるものではなく、2号石棺周辺からは中期後葉～後期の遺物が多量に出土したため、3～5号石棺が1・2号石棺に先行するであろうことが予想される。3・5号石棺の側石に作り出された溝については、当時の木材加工技術を考えればうなづけるが、実際に石を加工して溝を作り出したものとしては初例ではないだろうか。特に5号石棺の側石の西側は溝を2段作り出しており、結局外側の溝に小口を入れこんだ状況で検出されている。石材が加工しやすい結晶片岩であることも、木材加工技術を石棺に応用するきっかけとなったものと思われる。

古墳については5～7号墳のうち6・7号墳の調査を行ない、5号墳は現状保存とした。6・7号墳の調査により、2つの古墳の構造が弱冠相異することがわかった。2基の古墳のうち7号墳は貧弱ではあるが、横口を持つ石棺系の横口式石室であるのに対し、6号墳には横口ではなく、箱式の石棺であった。このことは2基の古墳に時間的な差があることを反映しているのと同時に、当時における社会変革の一端を表すものとも考えられる。出土した須恵器からすると、無蓋高杯も頗るいわゆる初期須恵器と言われるものにあたり、陶邑編年のI型式の2～3段階に比定されると考えられる。このことからすると、この2基の古墳は現在のところ県内本土部では古い方に属するといえよう。

前島の位置する大村湾での古墳の成立をみると、東彼杵町のひさご塚古墳、大村市の黄金山古墳、小佐古石棺などがあげられる。ひさご塚は県内本土部でも数少ない前方後円墳の一つで、その法量から5世紀前半の可能性が指摘されていた。平成5年の調査では内部主体が石棺系の横口式石室であるとされ、副葬品等から5世紀前半に位置づけられた。前方後円墳という畿内形式をとりながらも、内部主体は在来の箱式石棺の伝統を受け継いでいるという墓制の混在がみられる。大村市の黄金山古墳は石棺系横口式石室であるが、側石上の板石積と横口部分において堅穴系横口式石室の影響が非常に強いと考えられる。石室内より出土した土師器から5世紀中葉～後葉と考えられているが、それより古くなる可能性も指摘されている。大村市の小佐古石棺では、7基の石棺が確認され、1号石棺が前島の6号墳と同じく側石上に板石積を行ない、主体部は箱式石棺である。調査によれば4世紀後半～5世紀初頭に位置づけられるとさ



3号・5号石棺模式図

れている。これらから大村湾を中心とする5世紀代の古墳については次の4つのタイプに分類されるものと思われる。

- ④前方後円墳で内部主体は石棺系横口式石室（ひさご塚古墳）
- ⑤石棺系横口式石室であるが、豊穴系横口式石室の影響が大きい（黄金山古墳）
- ⑥主体部は箱式石棺で、側石上に⑤の影響なのか、数段の板石積を行なう。（前島6号墳、小佐古石棺1号石棺）
- ⑦⑧の石棺に簡単な横口を設けるもの。

4つのタイプを設定したが、これらはすべて在来の箱式石棺を基盤とするもので、他からの影響の中でも、伝統的な墓制から脱皮できない、あるいはしない大村湾岸の地域制を表わしているものと思われる。又、4つのタイプの新旧関係についても、個々の集団の新しい墓制への取り入れ方によって、同一時期内でも違う墓制が存在することがありうるものと考えられる。ただし基本的な流れは存在すると考えられるので、大村湾を超えた西北九州という枠の中で検討していく必要があるものと思われる。

参考文献

- ・時津町教育委員会『時津町郷土史』1979年
- ・時津町教育委員会『前島古墳群』1991年
- ・大村市教育委員会『小佐古石棺群』1988年
- ・小田富士雄『九州考古学39・40』「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」1970年
- ・近藤義郎編『前方後円墳集成』—九州編—、
宮崎貴大—記前西部— 1994年
- ・遠賀町教育委員会『島津・塚の元古墳群』1993年
- ・八女市教育委員会『立山山古墳群』1983年
- ・中村浩『和泉陶邑窯の研究』—須恵器生産の
基礎的考察— 1991年



Fig. 18 大村湾岸の5世紀代の古墳

図 版



遺跡遠景



遺跡近景（手前 7 号墳、上が 6 号墳、上右側が 5 号墳、南側より）



1号石棺



2号石棺残山状况



3号石棺盖石



3号石棺主体部



3号石棺、土器出土状况



4号石棺



5号石棺（南側より）



5号石棺蓋石除去（北より）



5号石棺主体部（南側より）
上部隅にほぞ溝が見える



6号墳調査前の状況（北側より）



6号墳封土除去後（西側より）



6号墳中央の蓋石除去



6号墳主体部



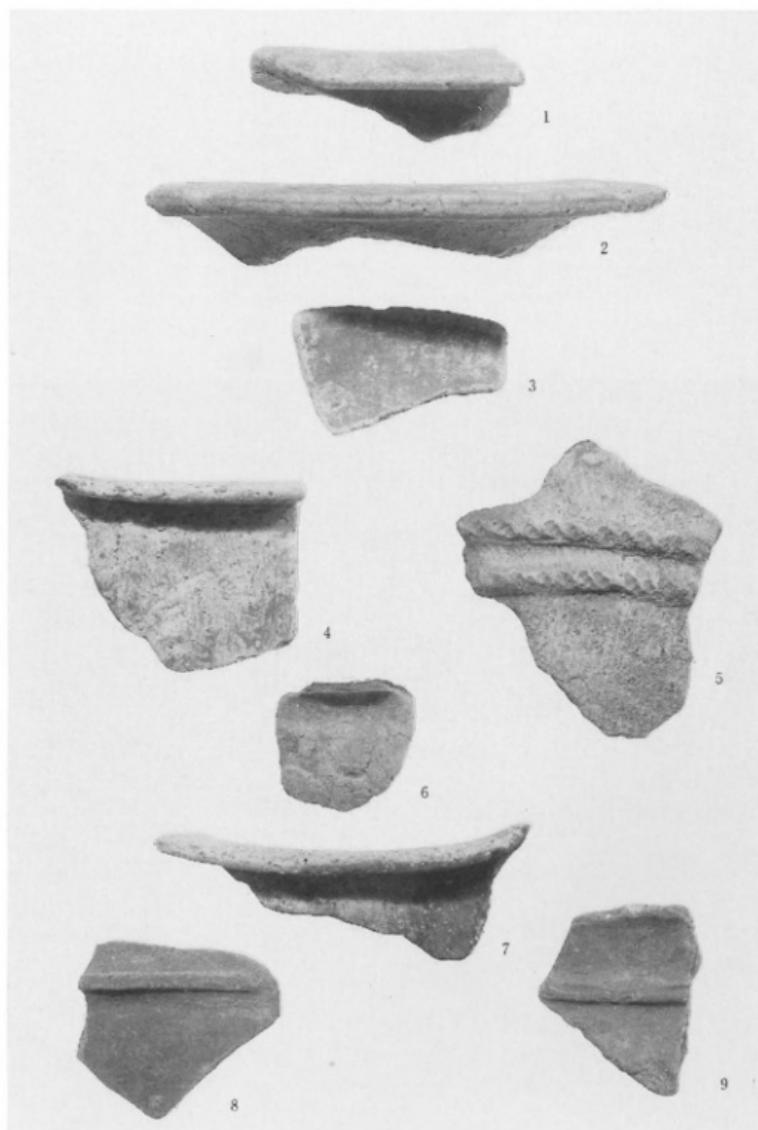
7号填主体部



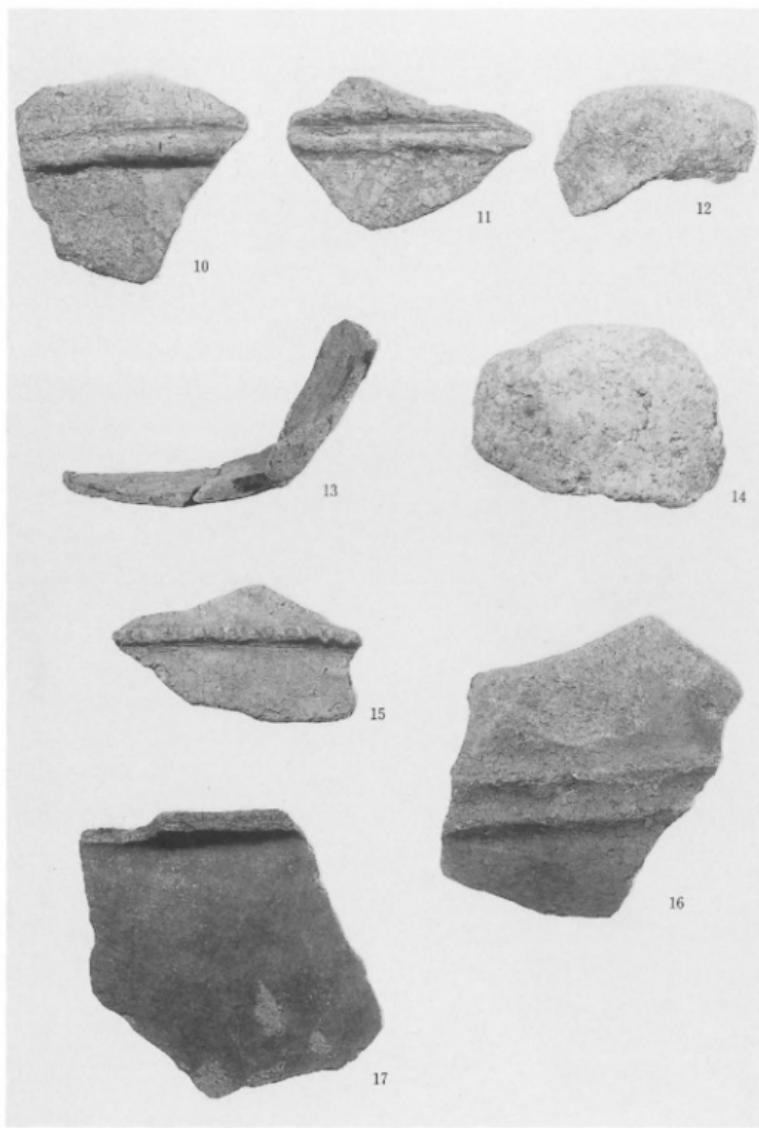
7号填横口部



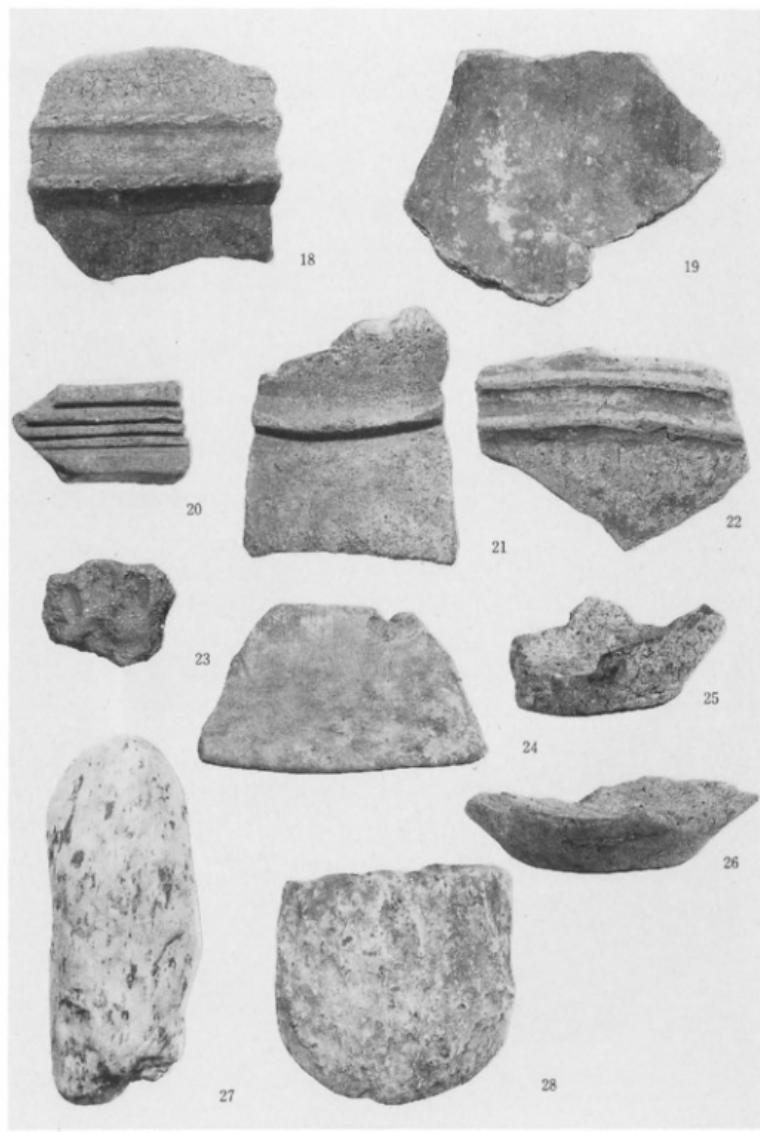
7号填隙出土状况



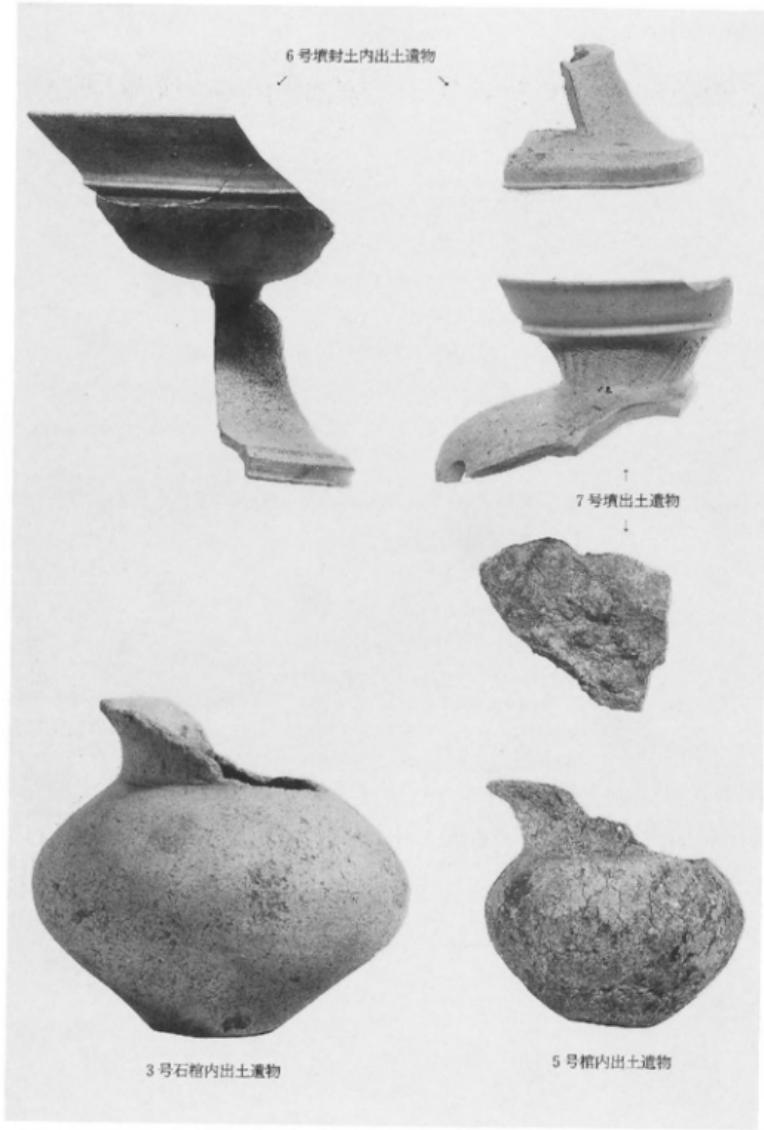
出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遗物

時津町埋蔵文化財調査報告書第2集

前島古墳群II

平成6年(1994)3月31日発行

発行者 時津町教育委員会
長崎県西彼杵郡時津町浦郷274番地
〒851-21 ☎ 0958-82-2211

印刷所 昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
〒854 ☎ 0957-22-6000㈹
